

ペルー ブルーベリー輸出は25.5%成長 日本市場進出を目指す

[Blueberries Consulting 2025年11月18日](#)

1月から9月のブルーベリー輸出が25.5%増加し、ペルーは世界最大の輸出国としての地位を固めた。新たな戦略的輸出先として日本に狙いを定めており、この果実の日本市場参入を可能にする植物検疫プロトコル策定への取り組みが進められている。

輸出業者協会(ADEX)の農産物輸出管理部門の発表によると、2025年1月から9月のペルー産ブルーベリーの輸出総額は7億4,324万8千ドルに達し、前年同期比で25.5%増加した。この数字は農産物輸出におけるベリー類の活力を裏付けるものであり、競争が激化する市場でこの成長をいかに持続させるかについて議論を呼び起こしている。

Trade Map(国際貿易統計のオンラインデータベース)によると、2024年時点でペルーは世界最大のブルーベリー輸出国であり、輸出額は22億7千万ドルで世界市場の34%を占め、オランダ(12%)、スペイン(9%)、モロッコ(8%)、チリ(7%)を上回った。このリーダーシップを維持するためには、従来市場の強化に加え、日本のような新規の高価値市場への進出が不可欠である。

ブルーベリーに関する世界的リーダーシップ 2025年これまでのところ、米国が依然としてペルー産ブルーベリーの最大の購入国であり、7%減少したものの**3億2,131万ドル**を輸入した。次いで**オランダが1億4,246万5千ドル(55.4%増)**、**中国が1億2,062万3千ドル(280.6%の急増)**であった。このほか、英国、香港、台湾、スペイン、コロンビア、ドイツ、タイ及びその他の多様な市場から需要がある。

供給側では、主な輸出産地はラリベルタ県(4億3,200万ドル)、ランバイエケ県(1億3,250万4千ドル)、イカ県(5,606万7千ドル)であり、アンカシュ、リマ、ピウラ、カヤオ、モケグアの各県が続いている。イカ県は国内第3位の輸出産地であると同時に、ペルーのブルーベリー事業に関心のある日本の代表団が最近、視察に訪れた点でも注目される。

日本：要求水準の高い戦略的パートナー ブルーベリー市場での国際的地位を維持するため、ADEXは山元毅大使を団長とする日本の代表団の視察をアレンジした。代表団は、イカ県の**ファミリーファームズ農場**とチンチャ市の**プロラン社**の施設を訪問し、日本市場が求める品質と安全性を保証するために重要な要素である収穫、梱包、及びコールドチェーン管理の工程を確認した。

同協会のパトリシオ・ルサント理事は、日本はペルー産農産物にとって極めて関心の高い市場であり、特にブルーベリーは「巨大な潜在力を持つ」と強調し、日本の厳格な食品安全基準を考えると、同市場への輸出を可能にする植物検疫プロトコルの署名に向けた**両国の衛生当局間の協調的な作業**が必要であると訴えた。

地域、基準、成長機会 同理事は、ペルー産ブルーベリーを日本へ輸出するためには、具体的かつ正式な規則を定める**政府間協定**が必要であると強調した。日本ではこの果実は栄養価の高い食品として評価されており、特に朝食で消費される。しかし、日本で栽培される品種は小粒で風味も異なるため、大粒で食味や食感に優れるペルー産ブルーベリーにとって大きなチャンスが存在する。

山元大使は、ブルーベリーを「**ペルーの農産物の強さの象徴**」であると評し、同分野の企業の技術力と革新性を強調した。視察では、資源の効率的利用、工程遵守、良好な労働慣行、高度な品質と食品安全等、日本のような要求水準の高い市場で競争するために不可欠な条件の責任ある管理体制が確認された。

この文脈で、出荷量の増加と輸出先の多様化は、技術、トレーサビリティ、規制遵守への継続的投資の必要性を際立たせている。日本は**ブルーベリー輸入国ランキングで順位を上げ、2024年には6%増加して26位**となった。ペルーはこの新たな需要を重要な輸出先へと転換しようとしている。生産者と輸出業者にとっての課題は、新たな世界的需要に競争力を適合させ、日本市場が提供するチャンスを最大限に活用することである。

出典: ADEX